



2015年10月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2015年10月
第104号

漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

竜胆-秋たけなわ



INEKO

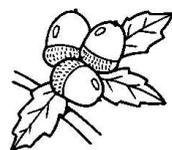
目 次

漢点字の散歩 (41) (岡田健嗣)	1
点字から識字までの距離 (97) (山内 薫)	12
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子)	18
東京漢点字学習会報告 (菅野良之)	24
漢文のページ	27
ご報告とご案内	29
編集後記 (木下和久)	31

漢点字の散歩（四十一）

岡田 健嗣

ルーシー先生が正しい



今回の散歩は漢点字からやや離れて、この間に読んだ（正しくは「聴いた」）音訳書の読後感を、述べてみたいと思います。その前に、「聴読」について、少し触れさせていただきます。

私の読書は、可能な限り漢点字の触読で行いたいと思っておりますし、視覚障害者の読書の方法として、それが最も優れていることは疑う余地のないところと考えております。しかし、残念ながら本会の会員が頑張つて活動して下さつてはおられますが、まだまだ漢点字書の数はほんの僅かなものに限られております。誠にそれを思うごとに、自らの非力をひしひしと感じざるを得ません。

私が「聴読」を読書の方法として採っておりますには、もう一つ大きな理由があります。前々回にも申し上げましたが、指先で点字に触れてそれを読み

取るという作業は、大変体力を消耗させるものです。しかも手の指先から取り入れることのできる情報は、極めて限られています。体力の許す範囲、また情報を取得する能力、指先の触覚を介しての情報の取得とそれを処理する速度などの生理的な能力は、否応なく触読の限界を知らしめます。

さらにまた、読むという行為は、たとい良質の読書ができたとしても、量が伴わなければよい読書とは申せません。正に読書は、読書の量がその質を決定すると申しても過言ではありません。

こう考えて参りますと、視覚障害者が読書に趣こうとするときには、そのことそのもので、既に大きな壁に直面していると申すことができます。視覚障害者が良質な読書を志向するとき、果たしてどれほどの量の読書をすればよいのか、それは叶うものなのか、誠に心許ない思いにさらされるのも、無理のないところに違いありません。こういう情況下で行う読書ですので、私は、できるだけ多くの、また肉体的に負担の少ない方法を選択すべきと考えて、文字から得られる情報を捨ててでも、内容を大掴みに

できる音訳書の聴読を、第一義的に選択しているのが現状です。勿論漢点字書が増えれば、それだけ漢点字書による読書にシフトして行くに違いありません。が現在の私の読書は、古典、あるいは詩歌は漢点字書を、小説や評論、そして非文学書は音訳書を読む（聴読する）ようにしております。

現在では音訳者の皆様も、対象の書物のどこを伝えて、またどこを伝えずともよいかという取捨にも心を配って下さっておられます。必要な情報のかなりの部分は、そのようにして届けられています。そもそも「聴読」は、音訳者の皆様の目と脳を通して、そこで理解し処理されて音声となったものを耳に受けて、言語として了解するという一連のプロセスを指します。そこでは既に文字あるいは文章が理解され処理されたエッセンスとなつて提供されま

す。「聴読」は、その意味で聴読者の側の負担を軽減する方法だと言えるのです。それだけ音訳者の皆様に、ご負担をおかけしていると言わなければなりません。一方聴読者の理解し得る幅も、限られたものになつてしまうことにも、充分留意される必要の

ある方法と言えるのです。それは、文字を直接読み取るという読書本来のプロセスを採らない方法であつて、それを見る角度を変えれば、文字から読み解くプロセスを回避していることでもあることを、聴読者は心しておかなければならないと、私はそう考へております。

前号では初めて漢点字で万葉集を読む機会を得て、中でも人口に膾炙した歌、山上憶良の「銀も金も玉も 何せむに まされる宝 子に及かめやも」（八〇三）、そしてそれに先立つ題詞と長歌に触れることができて、心底から驚かされたということを申し上げました。総括させていただくならば、憶良のこれらの作品群が収録されているだけで、万葉集の存在理由を知った思いがしたのでした。私が勝手に解釈していたものとはまるで違う、人の心の深淵を覗かせる、誠に味わい深い作品ばかりでした。この作品群は決して安らぎや幸福感をもたらすものではありませんが、この驚きは、極めて新鮮なものでしたし、その意味で大変幸福だったと言つてもよいと思います。これら憶良の作品に接し、また

それを踏まえて、遡って天智・天武・持統天皇治下の宮廷歌人、とりわけ額田王と柿本人麻呂の歌を、再度読み返してみたいと思っるところです。

今回机上に載せたい本は、十年を超える以前に、何かの雑誌の書評にあった、カズオ・イシグロ著『私を放さないで』（早川文庫）です。書評によると、臓器の提供のために生まれたクローンたちの生き様を描いた作品とある、いわゆる近未来小説です。私は直ぐにも読みたかったのですが、当時音訳書ができているはずもなく、そのまま時日を過ぎてしまいました。この度ひよっとしたことかと思いついて、図書館の蔵書を調べていただきました。2006年に音訳されていることを知り、早速貸し出しを受けました。

カズオ・イシグロは、知られるように、日本で生まれて、幼少時に父の赴任地のイギリスに渡り、イギリスの国籍を取得して、80年代の初めに、作家としてデビューしました。1989年には『日の名残』でイギリス最高位の文学賞「ブッカー賞」を受

賞しています。日本人の両親から生まれながら、その作品はイギリスの伝統に則った、緻密なプロットと適切な表現力に裏打ちされた構成が特徴と言われます。その意味でこの小説も、誠に見事な構成の作品です。イギリス小説の特徴としてよく言われる「犯人は執事だ！」の伝統は、ここにも遺憾なく発揮されています。筋を追いながらポイント・ポイントでオヤツと際どく種は明かさぬと見せて、最後の最後にそれが種であったことが分かるという手法、読者の気持ちをどうしてもそのポイントを再度追ってみないわけに行かなくさせるその手法は、誠に鮮やかと言わざるを得ません。

クローンと言えばこの作品が発表される直前に、やはりイギリスで、クローン羊の「ドリー」が誕生したという、センサーショナルな報道がなされました。ドリーの映像も公開されて、メーカーという鳴き声とともに、普通の羊と変わらない姿として、世界中を駆け巡りました。クローンとは、同じ遺伝子を持つ二つ以上の個体を言います。初めて人工的に、同じ遺伝子を持つ動物が誕生した事実、世界

は驚くとともに、そのことにどう対処すべきかの議論が、沸き上がりました。カズオ・イシグロが想定した近未来では、このドリーを誕生させた技術が、人に応用されて生れた「クローン人間」を登場させました。イシグロの提示したこの仮想世界を、私たちはどう受け止めるのか、是とするか否とするか、または別の世界を創出するのか、何れにせよさほど先でない未来に、何らかの選択が迫られることは間違ひありません。

人のクローンと言えば、自然にも誕生します。決して珍しくはありません。私の周りにも、何組みかの双子の兄弟がおられました。もつとも私はその片方の方とお付き合っているだけで、お二人同時にお会いする機会を得ませんでしたので、実際にはどのくらい似ておられるのか知ることではできませんでしたが、同じ遺伝子を持つておられるということはお二人の間では、普通の兄弟と一味違った、独特の関係が成立しておられるのだろうと、そんな想像をしてみます。恐らく私のこの想像は、間違ひっているに違ひありません。しかしこのように想像

させる何者かが、イシグロの小説の世界の、クローン人間を受け入れる社会の根底に、何らかの力を発揮しているように思われてなりません。

イシグロの小説には、主要な登場人物であり、また進行役として語り手を務める人物が登場します。ここでは「キャシー」と呼ばれる女性です。また主要人物として、「ルース」という女性と「トミー」という男性が登場します。物語はこの三人の人物を中心に展開されます。読者はこの人物たちを人物として捉える視点に立った位置に置かれて、この物語の世界に誘われます。

また別の意味での主要人物が三人登場します。「エミリー先生」と呼ばれる女性、「ルーシー先生」と呼ばれる女性、そして当初は「マダム」とだけ呼ばれて、クライマックスを迎えて初めてその名が「マリー・クロード」と明かされる女性です。彼女らはこの作品のキーウイメンではありませんが、ほとんど表には現れません。

作品の冒頭で語り手のキャシーが、自己紹介をします。自分は「介護人」を十二年勤めていること、

年齢は三十一歳であること、その年の末には介護人を退いて、次のステップに入る予定であることなどを告げます。何の予備知識もない読者は、ああ、老人ホームに勤めているのかな、転職を考えているのかななどと呑気に読み飛ばします。やがて彼女の幼少年期を過ごしたある施設内での生活の追憶が語られることとなります。

この小説は三部仕立てになっています。語り手であるキャシーの成長と三十一歳である現在、幼少年期、社会へ出立の準備期、そして使命の遂行期、キャシー自身の終焉の予感。

第一部はキャシーの幼少年期が語られます。読者には、まずは寄宿学校の学園風景と映る、明るい、賑やかな、幸福そうな、何の心配もなさそうな、どこにもありそうな普通の小・中学校の学園風景と映るに違いありません。（このことは、後にこの施設の運営者の努力の結果、キャシーたちにもたらされた環境であることが明かされます。）

ここでは学校のカリキュラムと同様の課程に基づいた授業が営まれ、昼休みには生徒たちは三々五

々、晴れた日は屋外で、雨の日は体育館や教室内で過ごし、スポーツやおしゃべりを楽しんでいます。

ルースもトミーも、キャシーとともにのびのびと学園生活を満喫しています。ルースは誠に才気煥発な少女です。またなかなかのエゴイストであり策士でもあります。キャシーは自身語り手ですので、どの程度の意地悪さを備えた少女であるかは、私たちに分かりません。しかしルースとのやり取りから類推するに、極めて普通の、活発な少女であると見てよいでしょう。トミーは、サッカーの得意な少年です。後にエミリー先生から「癩癩持ちで心の大きな子」という評価を得ますが、この癩癩が彼の幼年期の特徴でもあります。キャシーはそういうトミーを常に心にかけるようになって行きます。

しかし読者も徐々に、何か変だなど思わされてきます。まず授業の内容が、一般の教科ばかりでなく、社会に出た時の振る舞い方、一般人との性交渉に対する心構え、あるいは「提供」への備えといった、普通の教育課程にはない教科があること、健康診断が毎週のように行われること、また生徒たち

は、施設の外との接触が極めて限られていること、せいぜい生活用品を運んでくる運送業者との接触しかないこと、そして「先生」と呼んでいる人たちが「教師」ではなく、「保護官」であることなど、何か肌触りの悪さを感じられるのです。この時点でキャシーたちの置かれている位置がだんだん分かってきはしますが、まだ明らかではありません。

ある日雨に降り籠められているとき、ざわざわと雑談に興じているとき、そこには保護官の一人であるルーシー先生も一緒にいて、皆に話しかけます。皆さんは知らなければいけない、皆さんは俳優にはなりません。アメリカにも行きません。スーパーの店員にもなりません。それどころか皆さんの将来は決められています。介護人として勤めた後、臓器の提供者になります。そして使命を完了します。それをしつかり知っておかなければなりません。

ルーシー先生のこういう言葉の後、この小説が醸す雰囲気はがらっと変わります。次第に空気は重苦しいものになって行きます。ある日そのルーシー先生の退任が告げられます。キャシーが十六歳を迎え

たその秋、彼らは課程を修了して、その地を離れます。

第二部は、社会に旅発つに当たつての準備の期間です。各地に設営されている「コテージ」と呼ばれる施設で、小さな集団生活が営まれます。ここでは日常生活の全てを自らの力で行うという、言わば生活訓練の場が設定されています。小説中でこの部は、第一部に比べると印象に薄い感を免れません。十七歳・十八歳と言えば、確かに果敢な年頃ではありません。そしてキャシー・ルース・トミーの三人も、いよいよ大人の入口に立つことになりました。とはいえ外見的には言うほどのものではありません。ただそこで一つのエピソードが語られます。

ここでは外出もかなり許されていて、同居している先輩の一人がある町で、ルースによく似た女性を見かけたという情報をもたらします。早速その先輩とその彼女、そして件の三人で、車に乗って出かけることにしました。

ここで少し補足が必要でしょう。キャシーたちはクローンです。私たちのように両親の遺伝子を受け

継いで生まれたものではありません。具体的には語られませんが、ある人から細胞を抽出して、その核から取り出した遺伝子を、幹細胞に変化させます。それをさらに受精卵に変化させて、試験管の中で胎児にまで育てられます。彼らはそのようにしてこの世に生まれ出たものだと言います。そのような細胞の提供者を、彼らは「ポシブル（可能性）」と呼んでいます。見知らぬ他人ではあるが、同じ遺伝子を共有する可能性のある人、とでも言う意味なのでしょう。か。彼らの細胞提供者に対する、屈折した思いがよく表れている用語です。

ここでイシグロは、クローンにその親に対する何らかの執着と思いを語らせています。しかもそれらしき女性を、とうとう見つけることができたのでしたが、やや離れたところから観察しているうちに、人違いであるという結論に至ります。ルースの落胆は幾ばかりだったか、いやキャシーもトミーも、自らの親（ポシブル）への思いを抱えながら、ルースを思いやったのでした。気丈なルースは、あのような裕福な女性が自分のポシブルであろうはずはな

い、恐らく場末の酒場をめぐらしているような女に決まっていると言います。

コテージに帰って暫くしてキャシーは、ポルノ雑誌の束を見つめます。それを熱心に見ているところを、トミーに見とがめられます。トミーは気づいていたのでした。キャシーはポルノ雑誌の写真に、自分の母（ポシブル）を探していたのでした。理由はルースと同じです。自分のポシブルであれば、ポルノ写真のモデルになってもおかしくない、そう思っていることでした。

このことから分かることは、イシグロは、嘗て行われていた売血と同様の市場が、クローンの元になる細胞の受け渡しにも存在していると想定しているらしいことです。このことから、もう一つ進めて考えることができそうです。

イギリスの事情、アメリカやヨーロッパの事情は詳らかにしませんが、わが国の移植医療の現状を考えることで、臓器の需給状況を推定することはできそうです。現在我が国で行われている移植医療に用いられる臓器は、脳死者からと、生体間の提供から

なっています。臓器には心臓のように、脳死者からしか提供されない臓器と、腎臓や肝臓のように、生体間でも提供され得る臓器とがあります。

しかしそれを需給の面から見ますと、どちらの臓器も圧倒的に需要が勝っています。つまり移植医療に必要な臓器は、極めて不足しているのが現状です。それはイギリスでも事情は同じであろうことは容易に想像されます。イシグロは、このような移植医療からの臓器へのニーズに応じるために、社会の選択として、クローンを位置づけました。キャシーたちはこのようにして誕生したのでした。そのキャシーは、コテージの生活を二年ほど終えて、介護人となるべく、訓練センターに入る決心をします。第三部はキャシーの介護人としての活動と、ルーースとトミーの提供者としての生活が描かれます。「介護人」とは、臓器の提供に赴くクローンたちを、肉体的にも精神的にもサポートする役目の、後に提供者となるクローンに与えられた役割です。キャシーはそれを、十二年勤めてきました。

ルーースとトミーは、短期間の介護人から、早々に

臓器の提供者となります。提供は、四回行われて、彼らの使命はそこで完了します。提供は、四回行われることになっていくのですが、中には初回で完了する者もいますし、四回目まで元気なものもいます。

ルーースの初回の提供は極めて厳しいものだったとの噂で、それを知ったキャシーは、ルーースの介護人を志願します。こうしてまたルーースとキャシーは邂逅することになります。ルーースは二回目の提供で使命を完了します。キャシーに、トミーの介護人となることを言い残します。キャシーは承諾し、ルーースとの別れの後、それを志願します。

トミーの提供は最後の一回を残すだけとなってしまいました。ルーースのもう一つの遺言、マダムを捜し出して話をするというものを、実行する時間が迫ってきました。キャシーはルーースから教えられた住所を探り当てて、マダムの住居であることを確認します。そしていよいよトミーとともに訪問することを決心します。

二人がマダムの居住地である町を訪れると、誠に

幸運にも、マダム自身を発見します。そこで後を追って、マダムの住居の前で声をかけます。マダムも気づいていたようで、さほど驚く様子もなく、二人は家の中に請じ入れられます。

部屋に入ると少し待たされた後、マダムが入ってきて、二人は話を始めます。そこに奥で話を聞いていたと思しい、車いすに乗った女性が入ってきました。二人は驚きます。それは、エミリー先生だったからです。

ここではまだエミリー先生についてご紹介しておられません。先生は二人の出身の施設の責任者、一般には校長先生と呼ばれる立場の方でした。厳格な方で、いたずら盛りの彼らにとつては、誠に犯しがたい存在だったと言える方でした。

エミリー先生の話はこうです。キャシーたちクロンの子供たちを預かって、最終の目的もさることながら、教育を施し伸びやかな生活を保障することで、クロンとして生まれてきた子供たちも、個性を伸ばし、才能を伸ばすことができる。それを証明しようと、賛同者を募り、出資者を募って施設を作

り運営したのだが、それが果実を結ぼうとしたころ、学業や芸術の分野で能力を見せ始める者が現れるようになったところ、社会の空気が反転してしまつた。たちまち賛同者は離散し、資金は底を突いてしまつた。

エミリー先生たちはクロンとして生まれてきた子供たちを、普通の子供同様に育て教育することが、極めて当然のこと、人道に叶つたことと信じて活動してきたのですが、一般にはそれは厭わしい行為と受け止められるようになってしまつた、そう言われるのでした。クロンは我々に奉仕するために生まれてきたものだ、彼らは我々に健康な臓器を提供すればよい、人格や才能を認めなければならぬ、謂われはない、と言うのがその論拠でした。そこにはもう一つ、クロンの人格を認めれば、やがてクロンが社会の実権を握ることになるだろう、こういう恐れが蔓延したのでした。

エミリー先生とマダム（マリークロード）の家を辞し、帰途に着いてからトミーは、車を止めて外へ出て、「ルーシー先生が正しい」と叫びます。ルー

シー先生のあの言葉、皆さんはしっかり知らなければいけない、という言葉が、トミーの中に蘇ります。ルーシー先生は正しい、トミーにもキャシーにも、ルースやその他の子供たち、皆に一人一人の人格が備わっていること、「提供」という使命を負わされて生まれてきた者たちにも、人格はあるのだということを、ちゃんと知っておくべきだ、トミーはそれを今しっかりと掴んだのでした。

その後トミーの四回目の提供が近づいてきます。そしてトミーは、キャシーを自分の介護人から解任したいと言います。キャシーは、猛烈な怒りに見舞われますが、冷静になってみると、それはトミーへ向けたものではないことに気づかされます。こうしてトミーの最後の提供が終わり、キャシーも提供者となるとここで、この物語は終わります。

勿論ここで問われているのは臓器の移植医療の行く先です。あくまでこの小説は近未来のフィクション、インシグロはここでキャシーを初めとするクローンの人物たちを、私たちとは違った何かとは描いていません。だからこそ私たちは実在感を持ってこの

小説を読めるのでしようし、キャシーもルースもトミーも、素晴らしく魅力的に描かれて、私たち読者を否応なく彼らの側に引きつけます。彼らはクロンである以上、私たちとどこも変わらない姿形をしています。にもかかわらず彼らは、ここではある役割、移植用の臓器の提供者としての役割を担うことだけで存在が許されている、そう設定されています。キャシーによって語られ、キャシーを中心に展開する物語として私たちに開示されるこの作品は、その意味で、頗るノーマルな印象を与えます。しかしエミリー先生は言います。私たちはあなたがたが怖くてたまらなかつた、校庭で遊ぶあなた方を見ていると、悍しさに逃げ出したくなつた、それを必死に我慢しました、それがあなたがたを取り巻く世界なのです、と。読者である私たちはクロンの側にいるためか、このことが分かりません。キャシーとトミーも、不可解さを隠せません。エミリー先生宅を辞去するとき、マダム（マリー・クロード）は、キャシーの頬に触れながら「かわいいそうな子供たち」と呟きます。

この小説には既にはつきり書かれていたことですが、読者が一般社会の側ではなく、キャシーの側に立っているために、社会がクローンをどう捉えているかという視点がぼやけていることは否めません。ここにはイシグロの思惑が込められているようです。イシグロの設定したこの措置は、あくまで移植医療を推進するための策と位置づけられています。この設定に至る順序を振り返れば、臓器を病んでい

る人がいる↓その人は他人の臓器を移植すれば健康を取り戻せる↓移植に提供される臓器の数が圧倒的に少ない↓そこで移植用の臓器の生産を考えよう、というのが思考の系列となります。そしてクローン技術の発達に着目することになった。しかしイシグロはこの語りをクローン自身に委ねました。社会の側にいるはずの読者は、いつの間にかクローンの側に立って、クローンを普通の人間、人格ある人間、知識も能力も感情も備えた人間として受け入れた状況からこの作品世界に入ります。

これをイシグロの思惑から離れて、私が一般人としてこの物語に立ち会っていると考えてみましょう。臓器の生産のためにクローンが作られる、クロ

ーンは試験管の中で胎児の時期を過ごす、試験管から出た（誕生した）クローンは、一般の新生児と同様の姿をし、同様の世話を受けて成長する、そして幼少年期・思春期と、一般人が辿るのと同様のプロセスを経て成人に達する、そして臓器の提供に至る。私がそこにいたと仮定するとき、彼らクローンとどう接すればよいのか、私はここで思考停止を余儀なくされます。

医師で作家の石黒達昌氏は嘗て、脳死を人の死と認めるかという議論が盛んに交わされていたころ（この議論はわが国では決着したとされていますが？）、小説作品の中で、主人公の母親が脳死と判定されて、提供すべき臓器の受容者が決定するまで、生命維持装置によって生かされ、「死者」と見做されつつ、生命ある、臓器の保管庫という扱いに移行して行く姿を描いておられます。

人間の際限の無さは至る所で発揮されます。そろそろそれが、生命に及ぼうとしているのでしょうか。そのことがこれらの作品によって、先取りされると私は読みました。

点字から識字までの距離(九七)

野馬追文庫（南相馬への支援）(十五)

墨田区立ひきふね図書館 山内 薫

ふたたび南相馬へ

二〇一五年二月二八日の土曜日再び南相馬を訪問した。今回の訪問は、南相馬市の障害児施設「のびっこらんど愛愛」からのおはなし会の要請によるもので、Kさんは前日に南相馬入りをして二日間の訪問計画を立てて現地に向かった。

「のびっこらんど」というのは富岡町にある社会福祉法人福島県福祉事業協会が運営する発達の遅れや障害のある子どものためのデイ・サービス施設で「自宅から通園し、日常生活や集団生活への適応などの相談、支援サービスを提供します。」と呼びかけている。ホームページには次のようなサービスの概要が載っている。

〈対象〉

発達の遅れが気になる乳幼児・学童のお子さんや

障がい有するお子さんを対象。保育所や幼稚園に在籍していても利用可能です。※介護給付費の申請後、市町村が決定した利用可能な日数の範囲内で、ご家族の都合に合わせて通園日を決めます。※利用の手続きは、居住地の市町村福祉担当課にご相談下さい。

〈方針〉

《在宅の発達の遅れが気になる乳幼児や学童のお子さんやその家族を支援する事業》

遊びや運動などを取り入れたプログラムを提供しながら、日常生活の基本的動作や集団生活の適応訓練を行っています。お子さんが楽しい時間を過ごし、お子さんの健やかな成長のためにお子さんご家族を支援しています。

〈特徴〉

※保育所・幼稚園・学校と連携を図りながら、専門的な支援を行っています。専門スタッフによる巡回相談・外来相談を行っていますので、ご相談したいことがありましたら、ご連絡ください。プライバシーは、厳守いたします。

そして「のびっこらんど愛愛」のページには次のようなサービス内容が記されている。

療育サービスはお子さん一人ひとりのニーズに対応できるよう、専門各種スタッフが個別・集団的な支援形態療育プログラムに沿って支援します。

言語聴覚士による言語訓練。

送迎サービスご希望により自宅（または、指定の集合場所）とのびっこらんど愛愛間を送迎いたします。

食事サービス栄養士の献立のもと、昼食の提供をいたします。※別途料金を頂くようになります。

福島県双葉郡富岡町周辺にはこのような「のびっこらんど」が十一あることになっているが、その内、富岡町にある三カ所、広野町の一カ所、南相馬市の小高区の一カ所の計五カ所は原発事故の影響で休止中となっている。ちなみに休止していない他の「のびっこらんど」は南相馬にある愛愛の他、相馬市に二カ所、田村市に一カ所、いわき市に一カ所となっている。

二月二八日には埼玉を中心とした臨床発達心理士

の方たちが「のびっこらんど愛愛」を訪れ、障害のある子どもたちの親と面談して相談にのる日になっており合わせて子どもたちにお話し会をするという計画になっていた。

Kさんによれば、

「臨床発達心理士会埼玉支部は、震災直後さいたまアリーナに全村避難した双葉町の子どものための支援からスタートし、（私も埼玉に住んでいたのでアリーナには何度か行きました。アリーナでの避難光景は一生活れられない光景でした）双葉町が加須市の騎西高校に移ったのちも、そこが廃止されたあともずっと今に至るまで加須に残っている避難者を支援しています。その一方南相馬市在住の臨床発達心理士、Qさんより支援要請が入り、のびっこらんど愛愛の支援が始まり、ほかにも南相馬市内の保護者の相談会などを行っており、健康課や社協とも連絡を取り合い、南相馬には一年に三回ほどチームで支援に入っているようです。」

その相談会に合わせてわれわれも訪問することになったのである。

「のびっこらんど」についてはこの連載の初めの頃のWさんの現地報告にも何回か登場していた。二〇一一年の一〇月の報告には次のように記されていた。

「のびっこランドでは今日は六人の子どもたちに絵本の読み聞かせとお話をしました。ある子は「W」と私の名前を叫んでいました。まずはリクエストされ『くらいくらい』を。みんな聞いたことがあり安心して怖がっていませんでした。その後、先月からの約束の『けんちゃんねこはかせ』一五年ぶりのぶっつけ本番です。『しっぽ』。休憩のために『たけのこ芽が出た』でじゃんけんをし、『三びきのやぎのがらがらどん』『ねずみくんのチョッキ』。リクエストが続きます。『だいくとおにろく』も先月からの約束だったのですが、時間がなく（お迎えの時間が迫ってきてました）途中まででいいと聞いて「うん」と言ってくれたので鬼が出てくるまでを。その後、持って行った絵本（読んだ本以外は『じゅげむ』『ノンタンおねしょでしょん』『一匹のねこ』『おおきなかぶ』『へっこきよめ』）を自由に

手にしてもらい終わりました。次こそ『だいくとおにろく』を。

七月に絵本の読み聞かせを聞いてくれた子が、すっかり本が好きになり、一人で絵本を見る中で、ひらがなが読めるようになったとのことでした。うれしいです。（一〇月二六日）

さて、前日からの訪問記をKさんがレポートして下さっている。

〈二月二七、二八日の南相馬訪問報告〉

今回は二八日の「のびっこらんど愛愛」でのおはなし会で南相馬に伺うにあたり、これまで野馬追文庫を資金面と発送作業で協力くださったジネット（お茶の水女子大学児童学科・発達心理学講座／発達臨床心理学講座同窓会）の皆さんが南相馬の支援先を視察して、今後の募金などの呼びかけに生かしたいとおっしゃって下さり、ジネット六名（代表T会長）とともに南相馬に行きました。訪問先々々での人々との交流は大変意義深く、その一部にすぎませんが、ご報告させていただきます。

二七日(金)

九・五〇 福島駅東口一〇番発、福島交通バスで南相馬へ

私は何度も通ったこのバス道。川俣には人の姿も店も街の暮らしもかなり戻り飯館は廃村状態だが少し人の気配も。いつも行くとびに崩れ続けている家があるのだが今回もう完全にぺちゃんこに近い状態になっていた。周囲は黒い袋(除染した廃棄物)の山山山。通り道のほぼすべての田んぼや畑は荒地化。

一一・二七 南相馬市役所着、放射線測定器を確認、昼食「食彩庵」南相馬に来るといつもお昼はここ。なので人が確実に増えているのがわかる。南相馬市社会福祉協議会生活支援相談室のTさんを訪ねつつ、ボランティア登録。

一三・三〇〜一五・三〇 社協主催友伸ブランド仮設住宅サロン参加。この仮設は一番初めから出来た仮設。したがって野馬追文庫の本は一番初めのものから有り、ああそうそう、この本送った。この本だ…といろいろ懐かしかった。(お前たちは三年半こ

こでずっと、この人たちのくらしを見つめ人々の思いを感じてきたんだね。)十数名のお年寄りが集まり、血圧測定の後、歌を歌いながらみんなで輪になって肩たたきをしてからお互いの自己紹介。最高齢は九三歳。今回Yさんが見出してくれた「一刻餅と相馬の野馬追」伝承話を持参。ジネットのIさんとNさんが朗読。そこから相馬流れ山のお話になり、皆で歌ったり踊ったり。品格のある歌となどらかな踊り。お一人大変踊りがお上手な方がいらして皆で見とれる。

一番初めにお送りした紙芝居「かっぱのすもう」をIさんに読んでいただく。驚くほど皆さんが食い入るように聞き入ってくださいました。いつも仮設にお住まいの皆さんの助け合う姿や絆には心打たれますが、今回も一層みなさんの助け合い励まし合う姿が心に残りました。二八年四月には小高も戻れるようになるかもしれない。実際には様々な困難があるようですが、全く先の見えなかつた現実から、少し先が見えるようになられた。最高齢の方は九三歳、この方がお元気なうちに、小高の家に帰れるよ

うにしてあげたい。どうかそうなりますように：
…。

一六・三〇〇　じゅにあサポートかのおん見学

＊発達の気になるお子さんたちへの療育支援・放課後支援の場

所長Nさんが　ジネットメンバーに資料をご用意くださり丁寧にご説明くださいました。ジネットのみなさんはほとんどが子どもに関わる仕事についている方たちですので、たくさんの質問が出ていました。利用者の子どもたちとも少し交流。野馬追で送りました本や遊具も確認。

一八時　保健センター主任保健師Oさんと夕食会
「華のれん」ジネット会員で臨床発達心理士会埼玉支部のS（聖学院大教授）も参加。三時間以上にわたり途切れることのないお話が……。今も支援の最前線にたたれているOさんからのお話は、何もかもが参考になります。さつきまで元気だった同僚の方が、昨年八月の広島の土砂災害のテレビ映像を見たるとたんPTSDを発症。休職なさり治療を受けなが

ら最近復職されたお話。今は出産率が全国平均よりやや高い話。福島の子どもの自己肯定感が全国平均より高いという話では、無理をしているのか、という意見の反面、もしそれが本当に子どもたちの変化として起きているのなら評価してもいいのではという意見も。データの確認は必要。

二八日（土）

一〇時　ちゅうりつぷ文庫（Gさん）訪問

あたたかいおもてなしをうけました。Gさんが支えている南相馬の画家H子さんが合流。風と海と波乗りが大好きな彼女が、震災後の南相馬を描いた三冊の手作り絵本を読んでもらいました。声を震わせ、当手を思い出して涙ながらに読む彼女の心は心を打ちました。色彩がとても美しい、心象風景の絵本。南相馬を感じながら読んでいただくことが特に意味がある絵本でした。Gさんは震災直後は字が読めなかつた。絵本が助けてくれた。図書館に行ったら閉まっていた。自分の家庭文庫を再開するときには除染し、測定値を公表して、この数値でもよかつ

たら来てくださいと呼びかけた。当時小さなお子さんを連れてきてくれた親子二組に最近無事に第二子が生まれた。我が事のように嬉しかった。Gさんほもこもこの布の絵本や作品をとでも喜んでくださっています。小学校や児童センターでのおはなし会に送った野馬追文庫の本を必ず活用くださっています。

私たち全員に、福島のおはなし、こどものとも年中向き三月号の新刊『さくらひらひら とんぴんぴん』（わたりむつこ作、ましませつこ絵、福音館書店）をプレゼントして下さいました。

お昼過ぎに山内さんが加わりGさん、H子さんも一緒に「のびっこらんど愛愛」へ。今回臨床発達心理士会埼玉支部の方と協力して、親の学習会と子のおはなし会を併催しました。八名の利用者参加予定が四名に減ってしまいました。超個人的な三、四歳の四名。一緒に絵本を聞く体験も始めて。常に奇声を発しているお子さんもいらして、さてさどうなることかしら……。でもわたしは「絵本を

楽しめない子どもはいない」が信条ですので、信じて読みました。手遊びやパネルシアター「ぼんたくんの大変身！」など適度に挟みながら、布の絵本『こんこんくしゃん』、山内さんの巻紙芝居『おおきななおきなおいも』に皆はみとれ、Gさんのしかけ絵本『しっぼしっぼしっぼしっぼ』（木曾秀夫作 フレーベル館 二〇一一）、最後は紙芝居『みんなでぼん』（作・絵 まついのりこ、童心社）では全員がぼん！と手をたたいてくれて、超個人的な4人の男の子も見事に絵本の世界に入り込んでくれたのでした。奇声は全く聞かれませんでした。子どもってすごいね。絵本ってすごいね。そのあと彼らとたっぷり遊びました。

子どもたちの両親はお話し会の始まる前から、子どもたちとは隔離された別室で三時まで臨床心理士の方たちと話し合いを持っていたので、お話し会が終わった後は積み木やトランプリンなどで四人の子どもたちと遊んだ。親の話し合いが終わって帰る段

になって、子どもたちがそれぞれ自分のリュックバックを背中に背負ったのだが、どのリュックにも線量計が付いていたことが今でも目に残っている。聞くところによれば、まだまだ外遊びを自由にできる状況ではないとのこと。放射能禍はこれからもまだまだ続く。

子どもたちと親が帰った後、四時まで臨床発達心理士の方と施設の職員の方との話し合いを持った。

南相馬市社会福祉協議会の生活支援相談室の「さんから次のようなお礼のメールを頂いた。

「いつも支援して頂きありがとうございます。先日は南相馬にお出でくださり感謝申し上げます。四年経過するなかで、いろいろな問題を抱えながら生活しています。平成二八年四月帰還目標に皆さん生活しています。どのようになるか悩むものです。帰還されても問題点がたくさんあると思いますが、私達、相談員は継続しながら支援していきます。皆様には長く支援して頂き心の支えです。機会がありましたらまた南相馬市に足を運んで下さい。本当にありがとうございます。」

「東京漢字字羽化の会」第116～118回

例会報告とわたくしごと

木村多恵子



2015年7月の例会（第116回）7月8日（水）
13…30～15…30、場所、港区ヒューマンプラザ

7階第1会議室

いつものように朝日「歴史学」の入力、校正の組み合わせを決めた。

7月15日の横浜での印刷へは、IさんとSさんが行ってくださることになった。どうぞよろしくお願ひいたします。

横浜羽化のYさんが出席され、『萬葉集釋注』の校正の前に、『古事記全訳注』の校正をすることに、その留意点について説明を受けた。

基本的な記号類、その他入力方法について岡田さんから説明された。

2015年8月の例会（第117回、8月12日（水）
13…30～15…30、ヒューマンプラザ

7階第1会議室

何時ものように朝日の記事入力グループ分けを決めた。

9月16日横浜へ印刷に行っていたく方はIさんとSさん。何時もありがとうございます。

11月の活動予定を決めた。

11月11日例会と、21日の学習会

古語辞典の文字について、記号類について、「歴史学」の記事に出てきた表などについて岡田さんが入力の仕方を詳しく説明した。

2015年9月の例会(第118回)

9月9日(水)は残念ながら、台風の接近により、交通機関の影響その他考慮して中止と決めた。

あいにくの18号台風接近ということで、ほぼ10年の活動の中で、初めての例会休止となった。なんとなく木村としては寂しい。

『朝日「歴史学」』の入力・校正についてはAさんが組んで下さった。

9月16日の印刷は、SさんとIさんが行ってくだ

さる。天候その他スムーズでありますように！

* 予告

2015年10月の例会(第118回)10月7日(水)

14:30 ~ 16:30、ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

2015年10月の学習会(第93回)10月17日(土)

18:30 ~ 20:30、ヒューマンプラザ7階

第1会議室

2015年11月の例会(通119回)11月11日(水)

13:30 ~ 15:30 ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

2015年11月の学習会(第94回)11月21日(土)

18:30 ~ 20:30 ヒューマンプラザ7階

第2会議室

2015年12月の例会(第120回、今回から11年目

に入る。)、12月9日(水) 13:30 ~ 15:30

ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

2015年12月の学習会(第94回)12月19日(土)

18:30 ~ 20:30、ヒューマンプラザ第2会議室

わたくしと

今回も子供のころ読んだ本について書かせていただきます。

小学校2・3年のことである。

同じ寮の、中学のお姉さんSさんが、わたしひとりのためにある本を読んでくれた。点字の本一冊とはいえ、一度に読み切れるものではなく、十ページほどを2・3回読んでくれたが、わたしには暇があっても、Sさんには時間がなく、なかなか物語りを読み進めることができなかった。

わたしは先を知りたくてうずうずしていた。「まだ本を読んでください」と言いたくて、Sさんの側へ行つて様子を伺い、彼女の時間が開くのをどれほど待ったかしかない。「本を貸してください。一人で読ませてください」とは言い難かった。生意気だと叱られそうで怖かった。

けれどもある日、とうとう我慢できなくなつて、小さい声で、遠慮がちに「Sさんはもうあの本を全部読んだのですか？」と聞いた。すると「多恵子ちゃんに読み始めたときは最後まで読んでいたわ」と

言う。わたしは勇気を出して言った。「じゃあ、わたしにあの本を貸してくださいさる？」「あの本おもしろい？一人で読んでみる？貸してあげるわよ」と驚くほど簡単に言ってくれた。ああ、もつともつと早く頼めばよかった。でも叱られなくてよかったとほつとした。

それからこの本を抱きしめて、学院内に散在している、いくつものあづまや、生徒が使えるところ、そして一人で占領できるところを、その時、その時で選んで、この本に浸りきる日々が続いた。

まだ点字をすらすら読める能力もなく、ただたどしいながら、教科書とはまるで違つたわくわく感で読み始めた。最初の部分はすでに読んでもらつていたので、かなり意味も分かつた。が、本当に一人で初めて点字に指をたどらせて読むところからは、新たな緊張が始まつた。

ドイツの、ある地方に住む少女マリーの物語りである。

母はマリーがまだ小さいときに亡くなっており、庭師の父ジャックと二人暮らしをしている。

柔和で気立てもよく、働きのマリイは、早くから掃除も台所仕事も丁寧にしていた。鍋やヤカンは今、職人の手から届いたばかりのようにピカピカに磨かれていた。

父のジャックは、二人が暮らしている村の城主である伯爵家に仕える庭師であるが、彼はトネリコやヤナギの枝を使って、見事な籠を作ってもいた。ジャックは籠を編みながら、伯爵のお供で旅行したときのおもしろい話や、植物の育て方などいろいろな話を娘に聞かせた。春先の草木や木々の勢いのよい芽吹きは、若者の、希望に満ちた、何事も順調に伸びゆくときと似ているが、思いがけない天候の乱れや、突然の不幸に見舞われたとき、たちまちしおれてしまう心配もある。

夏のバラの咲きそろう見事さを愛でながら、花の衰えの早さについて語り、秋のリンゴの実りは、人を喜ばせるが、たちまち霜に覆われてしまうことなど、人の一生と比べながら話した。

ある日マリイは、父のために、籠を編む材料を探しに森へ行った。そのとき、初咲きのスズランを見

つけて父と自分のために二つの花束を作って、家へ帰ろうとした。そのとき、毎年春になると、都会からこの村へ来る、伯爵夫人と、令嬢アメリーが散歩をしているところに出会った。マリイはこの二つの花束を夫人とアメリーに差し上げた。「アメリーはとくにスズランが好きなので、これからお城へ持つてきてください」と夫人に頼まれた。マリイは毎朝スズランをお城へ届け、この花が終わると、いろいろな花を摘んでは届けた。そしてアメリーはマリイと親しくなり、マリイを妹のようにかわいがるようになった。ところが、アメリーの侍女アンリエットはマリイを妬んだ。

アメリー嬢の誕生日が近づいた。マリイはいつもの花束だけでなく、なにか工夫をこらしたいと考えた。ちょうどこの冬の間、父が沢山作った籠の中から一番見事な細工の籠をひとつ、マリイにくれていたもので、これを使って花籠を作ることにした。

誕生日の朝、咲き初めの花々を摘み、緑の葉も添え、彩りも見事な花籠にしたててお城へお祝いに行った。

アメリー親子はその美しさに感歎して、今日の晩

餐会の中心に飾りましようと言った。二人はそのお札になにかマリーにあげようと相談するために、マリー一人を伯爵夫人の部屋に残して他の部屋に行き、アメリカの新しい服を与えることにした。マリーは辞退したが、二人がしきりに勧めるので、ただいて帰った。

父はこれを見て心配顔になった。マリーには高価すぎるからである。マリーはその服を一度着てみてから直ぐしまった。

まもなく、真つ青な顔をしたアメリカが一人で駆けつけて来て言った。「あなたはどうかしたのではありませんか？母のダイヤ入りの指輪を直ぐに返してください。誰にも知られないうちに、一人で来ました。母の部屋に置いてあつた指輪です。」と言った。

この指輪は高価で、しかもアメリカが生まれたとき、伯爵が夫人に贈った特別な記念の品物で、アメリカの誕生祝いの晩餐会するときだけにはめる習慣になつているので、他のものと変えることもできないし、もう時間も迫っている、といった。

マリーは死人のように青ざめて、「わたしは少しも指輪を見ておりません、人様のものに指一本触れたこともありません」と静かではあるがきつぱりと言った。

こうして厳しい裁判が始まった。この指輪の値段の5分の1程度の品物やお金を盗んでも、死刑にされる時代であつた。マリーは無実を涙ながらに訴えた。裁判官の合図でアンリエットが入ってきて言った。「あなたがあの指輪を持っているのをわたしは見ました」と言った。これを聞いてマリーは非常に愕き涙に濡れながら、「それは嘘です。どうしてあなたはそんな嘘をいうのですか？わたしはあなたになにか悪いことをしましたか？」と言い、無実であることを述べた。

しかし夫人の部屋にマリーが一人だけで居たことなど、マリーの無実を証明することはできず、本来は死罪に相当するが、日頃のこの親子の正直な生き方と気高さと、いつも人に優しくしてきたことから、二人の財産没収と、親子一緒に、村からの追放の命令が下つた。

こうして親子のあてどない旅がはじまり、父の死とそれに続くマリーの艱難が重なる。悲しみの避けどころとして、父の墓前にぬかづいているところへ、突然アメリカが、親子を迎えに来る。マリーの潔白が証明されたからである。

この春、嵐が起きて、すでに古木になっていた城内の中心にあるリングの木が倒れかけた。ほおつておいて、この木が倒れては危険なので、みんなのいる前で切り倒すことにした。木が横倒しになると、そのてっぺんにカササギの巣があった。伯爵の二人の息子がカササギの巣を取ろうとすると、その小枝の中に光るものがあるのを見つけた。それはあの指輪であった。

カササギの習性は、光るものを集めて自分の巣に蓄えておくことだと、年輩いた猟師からの説明で皆は理解した。伯爵夫人が言った。「そういえば、この鳥はよくわたしの部屋にきました。確かにあの日、わたしの部屋の窓は開いていました。」と。：

（クリストフ・フォン・シュミット作『涙の花かご』 訳者は覚えていないが、著者は1768〜1

854年、ドイツ生まれだと最近知った。）

わたしはこの本を一人で読んだ気になっていたが、間違ひなくわたしに教えてくれたのはSさんである。

なぜって、自分は読み終えているのに、わたしに読み聞かせようとしてくれたのだ。

わたしが、読み終えた、と彼女に言ったとき、「どうだった？」と聞いた。

今読み直したら細部に覚え違いはあるかもしれないが、この本の中でわたしは三つのことが忘れられない。

ひとつは単純なことであるが、整理整頓、そして身の回りのものをきれいにしておくことである。現実には人様が見たら疑わしいと思うかもしれないが、わたし自身は気にしている。部屋の中や台所道具もわたしなりに気を配っている。

もう一つは、父親が娘に語り聞かせた様々な教えである。思い出して不思議なのは、秋と人の老いとを重ねて語る父の言葉は、上手に書き表せないけれど、切ない雰囲気は妙にわたしの心に残っている。

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

平成27年度 第3回（第90回） 報告

1 日時 平成27年6月20日（土）

18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第2会議室

3 出席者（省略）

4 周知事項

・学習会予定 7月18日（土）17時から第1会議室

5 学習会内容

使用教材 漢点字講習用テキスト 初級編第6回

8 複合文字（4）

ア 前回までの復習

3 紹介し落した文字および基本文字にない象形文字・会意文字二十三字

(54) 「肺」ラ下り（2・6の点・肉月偏）

と市（シ）…1・2・5・6の点）で表す。形成文字。

(55) 「背」肉月偏（ラ下り…2・6の点）

2015年10月1日 木曜

わたしは十一歳になったばかりの春に、突然父を亡くしている。この本を読んだ後のことであるから、あの漠とした不安は先触れだったのだろうか。人の世のはかなさを無意識に感じ取ったのだろうか？

秋の寂しさについては、言葉というより、その凜とした引きしまった空気が心に染みこんできたのである。いわゆる虫の知らせのような寂しさを先取りしていたのだろうか。

残る一つは、マリーが濡れ衣を着せられたこと、たった一人の証言によって人生の不幸を負わなければならなかったことが、思いがけない形で解決したこと。これは一つの見方だけでものごとを決めてはいけないということである。角度を変えてあらゆる方向から、ものごとを判断しなければならぬということである。

以後、「冤罪事件」がニュースになると、胸がきゆうんとなる。でもわたしは現実には冤罪事件に身を投じて関わったことはないのです、「人ごと」でいるのは事実である。

と北(キ…1・2・6の点)で表す。形成文字。

(56) 「半^{●●●●}」ロ(2・4・5の点)・ハ(1・3・6の点)で表す。牛を半身に切り、神に捧げる意。象形文字。音読みのハンは漢・呉音。

(57) 「晚^{●●●●}」日偏(リ下がり…2・3・6の点)と免(2・5の点)で表す。象形文字。字式は日十免。音読みのバンは漢音。"免"の付く字に「挽」がある。テキスト以外の熟語には「晚生(おくて)」「晚鐘(暮の鐘)」「晚稻(おしね…おくて)」「歳晚(さいばん…年末)」「早晚(遅かれ早かれ)」「晚節(晩年、老後)」「晚涼(ばんりよう…夕方の涼しさ)」「晚翠(冬枯れの時に草木が緑色であること)」。人名に「土井晚翠」など。

(58) 「秘^{●●●●}」禾(ノ木偏…2・3・6の点)と必(5の点)で表す。字式はノ木偏+必。本来はノ木偏ではなく示す偏。示は物を載せる台。音読みのヒは漢・呉音。テキスト以外の熟語には「秘湯」「秘蔵つ子」「秘伝」「秘法」「秘宝」「秘宗(真言宗)」「秘枢(ひすう…秘密で大切なこと)」「秘奥(ひおう…奥深いこと)」「秘訣」「秘秘」「秘「守秘」「秘匿」「深秘(しんぴ…深い道理)」

など。

(59) 「飛^{●●●●}」ロ(2・4・5の点)とヒ(1・2・3・6の点)で表す。字式は略。音読みのヒは漢・呉音。テキスト以外の熟語には「飛魚(あご、とびうお)」「飛鳥(あすか)」「暗中飛躍(暗躍)」「一足飛び」「飛車」「雨飛(うひ…雨のようにそそぎ飛ぶ。弾丸雨飛)」

イ 今回の学習

※「一・ロ・田」が縦に並んだ形「フ、フク」が含まれる文字2つ。

(60) 「富^{●●●●}」(2・5の点)とフ(1・3・4・6の点)で表す。「一・ロ・田」が縦に並んだ字をフ(1・3・4・6の点)で表した。「一/ロ/田」は腹の部分が膨らんだ酒壺の形。物資が豊かであること。豊かさを象徴する形。字式はウ冠/一/ロ/田。音読みのフは呉音、フウは漢音。テキスト以外の熟語には「殷富(いんぷ…富み栄えること)」「致富(ちふ…富を得ること)」「富士額(ふじびたい…美人の形容)」「富岳(富士山)」「富裕」「暴富(ぼうふ…急に金持ちになること)」。名前や地名に「富田」「福富」「富山」「富良野」

などがある。

平成27年度 第4回(第91回) 報告

関 正子

1 日時 平成27年7月18日(土)

17時00分～18時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者(省略)

4 周知事項

・学習会予定 8月はお休み。9月19日(土)、

10月17日(土)

5 学習会内容

使用教材 漢点字講習用テキスト 初級編第6回

8 複合文字(4)

ア 前回の復習

* 「一・口・田」が縦に並んだ形「フ、フク」

が含まれる文字2つ。

(60) 「富」 ウ冠の下に「一・口・田」が縦

に並んだ形。「一・口・田」が縦に並んだ形は、瓶と

か壺の形を表し、富の象徴。富は、富の異体字。熟

語は、前回の記録に加えて、「富貴花(ふうきか)牡丹のこと」「富貴草(ふうきそう)」「とも。字式はウ冠/一/口/田。

* 富士山は、かって「不尽山」を使っていた。

* 「宿題」ふじの他の表記例

〃不二(専一)〃 〃不治(治らない)〃 〃不時(時期はずれ)〃 〃父事(父としてつかえる)〃 〃父滋

(父の慈しみ)〃 〃巫児(みこととして家に残る女)

〃扶持(助ける)〃 〃府寺(役所)〃 〃阜滋(大

いに増やす)〃 〃附耳(内緒の話)〃 〃婦寺(女官

と宦官)〃 〃符璽(印、御印)〃 〃富児(富人)〃

〃膚辞(浮辞)、賦事(わりあて)〃

(61) 「福」示偏の右側に「一・口・田」が

縦に並んだ形で、神様に捧げられた豊かな供物を表

す。熟語は、「福寿」「福利厚生」「至福」「祝

福」「社会福祉」その他「福々しい」「福は内、鬼

は外」テキストにない熟語「福酒(おみき)」「福

徳(善行)」「福祿(幸い)」など。字式は示偏+

一/口/田。

今回は復習で終了。

漢文のペーシ

鷸蚌争 (『戦国策』)

擒^{ルト}相^ニ有^{ラント}不^レ蚌^モ日^ニ鷸^{一〇}肉^ヲ方^ニ日^ニ為^ニ
 之^ニ舍^{一〇}死^{一〇}出^テ亦^レ不^レ日^ク、蚌^{出^テ}出^テ臣^ニ燕^ヲ趙^ニ
 漁^ニ鷸^〇明^ニ謂^{ヒテ}雨^フ今^ニ合^{シテ}曝^ス来^{タリテ}謂^ニ且^ニ
 者^ニ両^ニ日^ニ鷸^ニ即^チ日^ニ而^{シテ}而^{シテ}過^グ恵^ニ伐^{タント}
 得^ル者^ニ不^レ日^ク有^ニ不^レ筓^ム鷸^ニ易^ニ王^ニ燕^ヲ
 而^レ不^レ出^テ今^ニ死^ニ雨^フ其^ノ啄^ム水^ニ日^ク蘇^ニ
 并^ニ肯^ニ即^チ日^ニ蚌^〇明^ニ喙^{一〇}其^ノ蚌^〇今^ニ代^ニ

鷸蚌(いつぼう)の争い

趙(ちよう)且(まさ)に燕(えん)を伐(えん)たんとす。蘇(そ)代(ぞだい)燕(えん)の為(ため)に恵(えい)王(わう)に謂(い)いて曰(い)く、「今日(けふ)臣(しん)来(きた)りて、易(えき)水(すい)を過(か)ぐ。蚌(ぼう)方(はう)に於(お)いて曝(ばく)す。而(しか)して鷸(いこ)其(その)肉(にく)を啄(く)らばむ。蚌(ぼう)合(が)して其(その)喙(くちばし)を筓(はさ)む。鷸(いこ)曰(い)く、「今日(けふ)雨(あめ)ふらず、明日(あした)雨(あめ)ふらずんば、即(すなは)ち死(し)蚌(ぼう)有(あ)らん」と。蚌(ぼう)亦(また)鷸(いこ)に謂(い)いて曰(い)く、「今日(けふ)出(い)でず、明日(あした)出(い)でずんば、即(すなは)ち死(し)鷸(いこ)有(あ)らん」と。両(りやう)者(しや)相(あ)い合(あ)ひて其(その)利(り)を争(あら)はせんとす。漁(ぎよ)者(しや)得(え)てこれ(こ)れを并(な)せ擒(と)る」と。

「漁夫の利」の元となつたたとえ話

殻(か)をあけて太陽(たいやう)の光(ひかり)を浴(あ)びてゐるドブ貝(どぶがい)をみつけたシギは、くちばしを突(つ)っこみ、ドブ貝(どぶがい)の肉(にく)を食(く)おうとするが、ドブ貝(どぶがい)は殻(か)を閉(と)じてシギ(しぎ)のくちばしを挟(くわ)んでしまう。シギ(しぎ)は「雨(あめ)が降(ふ)らなければドブ貝(どぶがい)は死(し)ぬぞ」と言い、ドブ貝(どぶがい)は「くちばしを外(あ)さないとシギ(しぎ)は死(し)ぬぞ」と言(い)いかえして、両(りやう)者(しや)は譲(や)らない。そこへ漁(ぎよ)師(し)が来(き)て両(りやう)方(はう)とも捕(と)まえてしまつた。

参照図書

『朗読してみた中国古典の美文』
渡辺精一(祥伝社新書)

易水(えきすい)は、趙(ちよう)と燕(えん)の境界(けいがい)にある川(がは)。二国(にこく)の争(あら)ひは、秦(しん)の利益(りやく)になるだけであり、趙(ちよう)が燕(えん)を攻(せ)めるのを思(おも)いとどまるよう説(せつ)得(とく)する。蘇(そ)代(ぞだい)は諸(しよ)国(こく)を渡(わ)り歩(あ)く遊(ゆう)説(せつ)家(か)。





鶻 蚌 ノ 争 ヒ

(『戦国策』)

趙 ス 且 ニ 伐 タント 燕 ヲ。

蘇 代 為 ニ 燕 ノ 謂 ヒテ 恵 王

ニ 曰 ク、 「 今 日 臣 来 タリテ、 過

グ 易 水 ヲ。 蚌 方 ニ 出 デテ 曝

ス。 而 シテ 鶻 啄 ム 其 ノ 肉

ヲ。 蚌 合 シテ 而 筭 ム 其 ノ

喙 ヲ。 鶻 曰 ク、 『 今 日 不 雨 フ

ラ、 明 日 不 ン バ 雨 フラ 即 チ 有

ラント 死 蚌。』 蚌 モ 亦 謂 ヒテ

鶻 ニ 曰 ク、 『 今 日 不 出 デ、 明

日 不 ン バ 出 デ、 即 チ 有 ラント

死 鶻。』 両 者 不 肯 ン ゼ 相

舍 ツルヲ。 漁 者 得 而 并 セ 擒 ルト

之 ヲ。」

「報告と案内」

一 『萬葉集釋注』について

横浜では平成二十四（二〇一三）年度から横浜中央図書館に、毎年一巻ずつ納入して参りました『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）も、本年度の分が四巻目となります。ようやくその姿が見え始めました。以下に、巻七の冒頭の歌と、伊藤先生の「釈文」の冒頭の部分をご紹介します。

天（あめ）を詠（よ）む

一〇六八

天の海に 雲の波立ち 月の舟 星の林に 漕ぎ
隠る見ゆ

（あめのうみに くものなみたち つきのふね
ほしのはやしに こぎかくるみゆ）

右の一首は、柿本朝臣人麻呂（かきのもとのおそみひとまる）が歌集に出づ。

「釈文冒頭より」

巻七の「雑歌」は、この歌から一一二九まで、詠物歌が並ぶ。その大部分は季節語を有しない。その



点、季節の知られる詠物歌を集める巻十の「雑歌」と相對する。編纂方法は、出典未詳で作者を示さない詠物歌群の中に「柿本人麻呂歌集」所出の歌を交える形を取る。もともと、出典未詳の無季詠物歌集があり、その中に無季人麻呂集歌を織り交えたのが、巻七「雑歌」一〇六八〜一二九の歌群と見てよい。この一〇六八〜一二九のうち、一〇六八〜一六が天部で、右の一〇六八はその冒頭歌である。「柿本人麻呂歌集」所出歌で、しかも格調が高いので、冒頭に飾られたものと見える。

一首は天象を地上の物に譬えて詠んだ歌で、宴席歌であった気配が濃い。『懷風藻』に「五言、詠月一首」と題する文武天皇の漢詩があつて、発想が似る。

月舟は霧の渚（なぎさ）に移り、／楓楫は霞の浜に泛（うか）ぶ。／台上流耀（りうえう）澄み、／酒中去輪（きよりん）沈む。／水（みづ）下りて斜陰（しやいん）碎け、／樹（このは）除（ち）りて秋光新（あらた）し。／独り星間（せいかん）の鏡を以ちて、／還（さら）に雲漢の津（わたり）に浮かぶ。

人麻呂集歌には、忍壁（おさかべ）皇子・弓削（ゆげ）皇子など、天武天皇の皇子たちの宴の座で披露されたと見られる歌が多い。九・一六八二〜四・一七〇一〜六・一七七三〜五など。今の歌も、そのような場での月見歌で、漢詩の発想を呼びこんだ点が評価されたのであろう。

（以下略）

漢点字版は十一分冊の予定です。お楽しみに！。

同書第一巻〜三巻は、価格差保障の対象となりました。詳細は日本漢点字協会にご相談下さい。

二 『岩波古語辞典』について

東京では、『岩波古語辞典』の漢点字訳を続けておりますが、この程この項の最後を残して、ア行・カ行が完成致しました。これはパソコン用のファイルでご提供致します。以下に、『広辞苑』と比較していただくために、「今日の月」の項目を貼り付けます。ご一覽下さい。

「広辞苑」より

きょうの、つき【今日の月】ケフ：／陰曆八月十五夜の名月。こよいの月。季・秋

「古語辞典」より

「けふのつき」（キョウ） 「今日の月」

八月十五夜の月。名月。今宵の月。「天に名の高さおとらじ」（俳・犬子集 五）

（続けて「今日の春」も抽出してみます。）

「けふのはる」（キョウ） 「今日の春」

今日が春であることを強調するという語。今日という

春。① 立春をさす。「年内立春の日。なほ待

たば立つや恨みん」（萱草） ② 元日をさ

す。「去年（こぞ）とやはいふ間も昨日」（宗牧

独吟何木百韻） ③ 三月尽（さんぐわつじん）

をさす。「かへる里あらばぞ恨み」（春夢草）

* 江戸時代、おおむね元日をさすようになる。

三 音訳版『常用字解』の進捗状況について

『常用字解』の音訳活動の作業も、DAISYのレベルの配分をはかるところまで至りました。全体が完成するまでにはまだまだ時間がかかりますが、臍気ながら形が見えてきたとは申せましょう。

お楽しみにお待ち下さい。

編集後記

▼先日、岡田さんが主宰する
有限会社「横浜トランスファ
福祉サービス」創立10周年の
祝賀会にお招きを受け、羽化の会の他の2人と共に
出席させて頂きました。この会社は視覚障害者
の外出を支援するガイドヘルパーを派遣すること
を主な目的として発足したのですが、それだけ
でなく、各種の障害者の外出を支援しています。
私はその発足当初から営業支援のためのコンピュ
ーターシステム開発でお手伝いをしてきました。
このような会社が10年も存続するのは並外れた努
力や苦労が必要で、ここまでこの事業を進展させ
てこられた岡田さんの実力と精神力の強さに敬服
せざるを得ません▼この「うか」も、これで104号を
数えます。その間一貫して漢点字の普及に心を砕
き、それを文章で表現してこられた岡田さんには、
ただただ賞賛の言葉を贈ることしか思いつきませ
ん。来年は「横浜漢点字羽化の会」発足20周年を迎
えることとなります。当初からこの会の活動に関
わってきたわれわれは、それだけの年を重ねたわ
けで、心身の衰えを感じることもしばしばです。

(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は来年1月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。